

礼文・利尻の花のハイキング

(2009年6月17日～20日)

八千代市 松尾 昌泰

1. クロアチア行きが、礼文・利尻の花のハイキングになった。

この平成21年(2009年)6月に礼文・利尻の花ハイキングに行ってきた。

当初、クロアチア・スロベニアに行く予定で、旅行業者に申し込みを済ませていた。ところが、新型インフルエンザが世界的な広がりを見せ、4月下旬にはクロアチア近くの国へも広がってきた。海外旅行で危険な場所は、まずいろんな人の集まる国際空港だし、長時間の密室状態になる国際便の航空機である。今後どう広がるのか、心配してまで出かけるのはストレスになるので、クロアチア行きはキャンセルした。

今から思えば、広がりも限定的で、毒性も強くはなかったので、キャンセルしなくても良かったかもしれない。

6月中旬は空けていたので、梅雨のない北海道旅行に切り替えた。それも礼文・利尻の高山植物を見て歩くツアーにした。(今年の北海道は関東以上に雨が多いのも温暖化のせいだろうか。)

出かける数日前に、北海道に居るといふ添乗員から電話があり、「礼文・利尻は寒い。特に風が強いので体感的には零度だ。必ず手袋も持参するように!」とのことだった。ビックリしてインターネットで調べたら、やはりその通りで、防寒衣を着た寒そう姿ばかりだった。

しかし、実際には、ツアー初日の午後一番だけが寒かっただけで、旅行期間中の天気は良かった。現地の人や花ガイドも言っていた、「久しぶりに太陽が出てきたので、高山植物はいっせいに開花してきた。本当に運がよい」と。

ツアーの参加者は13名で、花が好きな人が多く、花の写真をパチパチ撮っていた。私も触発されて、途中から花の写真撮影開始、しかし、帰ってからの百枚を超える花の写真の整理は断念した。



レブンウスユキソウ(キク科)

礼文島に自生する高山植物で、礼文島の代表種。スイスの国花エーデルワイスも同じ仲間。礼文島のエーデルワイス。(礼文薄雪草)

礼文島でも利尻島でも現地の花ガイドが付いてくれたが、花の名前を主に説明してくれるが、名前を聞いても3歩も歩けば忘れてしまう。名前だけでは自然に親しめないが、気になった10種だけは(少し調べなおして)写真として残すことにした。

2. 礼文島・利尻島は「絶景と高山植物の宝庫」

(1) 礼文島

礼文島は高山植物の宝庫であり、ウニの産地である。この島は隆起して出来た島だそうで、大きな木が無い島である。(大きな木がないのは、何回もの火事に遭ったからだそうだ。)

高山植物は高い山に登らなければ見ることができないが、礼文島では海岸近くから最も高い礼文岳(高いとっても標高490m)まで、いろいろな高山植物が咲き、それも時期により種類が異なり、その数はなんと約300種とのことだ。

礼文島にフェリーで着いたら、すぐ「花ガイド」による、桃岩のハイキングが始まった。レブンソウ、レブンシオガマなど、「レブン」とつく植物も多く、最初は、花ガイドの説明に興味津々と聞いていたが、次から次へと、花の名前がポンポン出てくる。覚えられるわけがなく、だんだん耳に入らなくなった。



レブンアツモリソウ(ラン科)

礼文島だけに生息する野生の蘭、紫色でなく黄白色が特徴。和名の由来は、袋状の唇弁の姿を平家物語に描かれた平敦盛の背負ったホ口から。
(礼文敦盛草)

次に礼文島の東海岸を北上し、レブンアツモリソウを育てている高山植物培養センターやレブンアツモリソウの群生地に行った。レブンアツモリソウの花は、紫ではなく淡い黄色で上品だった。(八千代の自宅の近くの「少年自然の家」の野草園には紫のアツモリソウがあり、開花時期には毎年見に行っている)

このレブンアツモリソウは希少種とされていて、群生地は厳重な柵で囲まれて、更にパトロール隊が盗掘を監視をしていた。

高山植物もすばらしいが、礼文の景色も素晴らしい。大きな木がないので、遠くの景色は山肌に緑を貼り付けたような、異なった趣きを持っていた。



(2) 利尻

利尻島は、海底火山が噴火して出来た島で、島自身が円錐形の山（1721m）である。そのため、海岸線近くまで火山岩がゴロゴロしており、また、山に降った雨は地中にしみ込み、通常は山麓に湧き水として出てくるが、この利尻では島の周囲の海に湧き出てくるそうだ。

昆布は砂地ではなく岩などに張り付いて成長する。利尻島の周りに、特産のコンブが沢山生育しているのは、噴火した岩が利尻島の周囲にあるからだろう。

利尻山（1721m）の周囲を一周する道が、即ち島を一周する道である。我々ツアーではバスで3 / 4周し、いろんな角度から「利尻富士」を見た。島には沼が幾つかあり、水に移る利尻富士の姿は、「絵に描いたように」ではなく「絵に描いたより」すばらしかった。



(3) 稚内

礼文と利尻だけではなく、稚内のノシャップ岬、稚内公園、宗谷岬なども見学した。

稚内は日本最北端の地で、以前は樺太への玄関だった。漁業中心の町は、旧ソ連の 200 海里漁業専管水域に打撃を受け、今は酪農業と観光が重要な産業となってきている。

稚内では、ここにも、あちらにも・・・と、多くの碑が建てられている。この碑を見るだけで、稚内的一端を知ることが出来そうだった。

例えば、・・・

- **日本最北端の地の碑** 宗谷岬の先端、北緯 45 度 31 分 22 秒の“日本最北端の地”を標す記念碑。43km 先にサハリンがある。
- **間宮林蔵の立像** 初めて日本から樺太に渡り、樺太が島であることを発見した探検家の立像。
- **旧海軍望楼(ぼうろう)** ロシアとの国交悪化の明治 35 年(1902 年)に国境の防備として作られた要塞。日露戦争時には宗谷沖で、ロシア軍艦「ノーウィック号」と日本海軍巡洋艦「対馬」「千歳」との戦いが行われた。
- **九人の乙女の碑** 終戦の昭和 20 年 8 月 15 日の玉音放送後、ソ連軍が樺太への艦砲射撃や、歩兵の侵入が迫り、樺太で最後まで交換業務の果たして自決した乙女の交換手の慰霊碑。
- **祈りの塔** 昭和 58 年の大韓航空機撃墜事件の遭難者の慰霊と、2 度と悲しい歴史を繰り返さぬよう建てられた塔。この塔をみて、全く忘れていた事件を思い出した。

3. ウニはどうやって岩に張り付いたり、動いたりする？

礼文島では「ウニ味覚体験」、そして利尻島では海底探勝船では海底の昆布とウニを観察した。

礼文の「ウニ味覚体験」では、水槽から取り出したウニは、しばらくして動き出す。海水の無いところでは針をかなり大きく動かして、ウニは体を動かすようだ。

活きたウニは、「甘~い」の一言。大きなウニ 2 個をペロリと食べた。日頃、ウニはあまり食べないが、寿司屋などで食べるウニには、外観や美味しさを保たせている為に「ミョウバン」が加えられているようだ。

また、利尻の海底探勝船では、船長がウニを採取して、水の中に入れて見せてくれた。ウニはしばらくすると、針の間から細長い紐状の足を、沢山伸ばしてきた。その先端で底に張り付き始めた。これがウニの伸び縮みする「管足」で、体を固定したり、自由に体を移動したりするようだ。はじめて見た。サプライズだった。

旅行期間中の食事には、やはりウニや海草類が多い。昼食に「ウニ丼」を食べたが、白ご飯が全く見えない程、こんもりウニが山盛りにのせられていた。これを食べてからは、ウニは食べたくなくなった。

4. 地球温暖化に関すること 2 点

(1) 温暖化の影響で、「ヨレモク」が利尻の生態・経済を脅かす！

南の海藻ヨレモクが北上し、利尻島(鬼脇海岸)では、ヨレモクが増え、昆布やウニにが少なくなっている。釣れる魚も変り、減っている。ここ数年は駆除をしているが、駆除では間に合わなくなっているようだ。

ヨレモクは、全長 40 センチほどで細かい葉が密生し、夏に葉を伸ばして日光を遮り、昆布の成長を妨げる。硬くてウニやアワビが寄りつかず、漁の邪魔になり、船のスクリューに

絡まることもある。夏から秋にかけて水温が下がらないと、昆布の胞子が減ったり成長が悪かったりで、昆布が少なくなると考えられている。

ウニと昆布がなければ礼文・利尻の漁業・経済は成り立たない。海が壊れ始めている！

(2) 宗谷岬ウィンドファーム等の風力発電

宗谷岬には 57 基、67000kw など、稚内市内には官民合わせて 74 基、76000kw 程度の風力発電があり、日本有数の風力発電地帯である。稚内市の消費電力の 7 ~ 8 割を供給。

横目で見ただけであるが、外見上は健全に動いているように見えた。だが、以前聞いた話だと、北海道電力へ売却する値段は、たった 10 円未満だった。

欧州のように、もっと高額で買い取る制度が出来ない以上、自然エネルギーは決して拡大しない。

以上